様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：８４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２０１

研究課題名（和文）ベルリン工芸博物館開館時の展示方法一考－源泉としてのジオラマとグロピウス一族

研究課題名（英文）Study for the presentation strategy in the Museum of Applied Arts in Berlin during its founding time - Diorama and the family Gropius as essential origin

研究代表者
池田　祐子（Ikeda, Yuko）

独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：５０２７０４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：1867年に設置されたベルリン工芸博物館は、まずカール・グロピウスが造った「グロピウスのジオラマ」を展示施設として開館した。そしてマルティン・グロピウスの設計によって独自の博物館建物が完成した。ジオラマは19世紀にヴァーチャルな視覚体験を可能にした画期的装置であるが、本研究では「グロピウスのジオラマ」には展示機能や教育機能も備わっており、それが未体験の時代や国の応用芸術作品を展示する工芸博物館の展示戦略に受け継がれたこと、そしてその際にグロピウス家が重要な役割を果たしたことを、当時の新聞資料などを用い、具体的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The Museum of Applied Arts in Berlin was founded in 1867. Its first gallery opened in the former “Diorama of Gropius” created by Carl Wilhelm Gropius. The original museum building was designed by Martin Gropius and came to open in 1881. Diorama is the revolutionary device enabled the virtual visual experience in the 19th Century. Remarkably the functions as gallery and workshop were adapted to “Diorama of Gropius”. This study can explain concretely, on the basis of contemporary documentation like as new paper, periodical etc., that the multi-function of Gropius’ Diorama was succeeded to the presentation strategy of the museum of applied arts which showed the objects from the period and country not enabled to experience practically and that the family Gropius played the distinctive roll in this history.

研究分野：ドイツ近代美術・デザイン史、日独文化交流史

キーワード：工芸博物館　ジオラマ　グロピウス　ベルリン

## １．研究開始当初の背景

ここ数年、欧米の工芸博物館さらにはデザイン・ミュージアムでは、展示（環境）のリニューアルが相次いで行われている。その基本となるものは、時代（様式）ごとにひとつの空間を当時の文物を可能な限り利用して再構成する展示か、素材や技法別に作品（物）そのものの特性を明らかにしようとする標本的展示、より中心的なのは両者を共存させた展示である。そのような展示、特に前者の展示手法は、社会背景や建築空間と直接的関係をもつ応用美術作品の展示手法として、とくに欧米でひろく取り入れられている。この手法自体は、ロンドンのサウス・ケンジントン博物館（現在のヴィクトリア＆アルバート博物館）から始まったと考えられるが、ドイツにおいても 1880 年代に各地で工芸博物館建物が建設された際に、積極的に採用された。ベルリンも例外ではなく、1881 年の博物館専用建物開館時には、1 階にこの手法を採用し、中世からロココにいたる展示が行われた（図 1）。

図 1 「ベルリン工芸博物館のゴシックの間（マルティン・グロピウスの空間構成による）」1890 年頃

筆者は以前の研究において、ベルリン工芸博物館がこのような展示手法を採択した理由を、初代館長ユリウス・レッシングの「工芸の歴史」の可視化に求めた。しかしこの「歴史の可視化」という問題が、19 世紀における「視覚」というより広い問題意識とどのように関わり、それが工芸博物館とその建物の設立経緯や展開といかなる影響関係にあったのかについては、いまだ詳細に検討されてこなかった。ベルリンにおけるこの問題に深く関わった人物としては、ドイツにおける新古典主義の建築家として著名なシンケルと親交を持ち、自身も舞台芸術家そしてベルリン初の「ジオラマ」館経営者であるカール・グロピウス（図 2）、そしてシンケルの影響を受けベルリン派建築の一翼を担い、工芸博物館の設立に関与しその建物を設計することになるマルティン・グロピウスが挙げられるが（図 3）、研究の鍵となるこの一族を、ひとつの流れに位置づける研究は、（特に日本では）これまで全く行われてこなかった。

図 2 ヘッカー・ジュニア《カール・ヴィルヘルム・グロピウス》1815 年、ベルリン市立博物館財団

図 3 「マルティン・グロピウス」1876 年頃

## ２．研究の目的

ベルリン工芸博物館は、設置当初、独自の博物館建物を持っていなかった。そして最初の博物館建物として再利用されたのが、「グロピウスのジオラマ」と呼ばれる「ジオラマ」施設であったことに注目したい。自身は移動することなく、目の前に外国の名所の風景が、時に光の変化を伴いながら、様々に現れる装置を備えた「ジオラマ」や「パノラマ」といった施設は、ヴァーチャルな体験を可能とし、19 世紀の人々に新たな視覚の在り方を伝えることになった。工芸博物館における時代をめぐるような展示は、実際には体験し得ない歴史や空間を移動する視覚の提供という点で、この「ジオラマ」や「パノラマ」と密接な関係を持つと考えられる。その点については、伊藤俊治氏が『ジオラマ論－「博物館」から「南島」へ』（1987 年）において明確に指摘しているが、本研究の目的は、ジオラマから（工芸）博物館への流れを、カール・グロピウスからマルティン・グロピウス、さらにはバウハウスの創設者ヴァルター・グロピウスという一族の繋がりとリンクさせ、ベルリン工芸博物館の成立と展開を軸に、具体的

に検証することにあった。

## ３．研究の方法

カール・グロピウスについても、マルティン・グロピウスについても、日本においてはほとんど研究の蓄積がないため、最初の作業として行わなければならなかったのは、両者に関する基礎資料の収集である。まずは、両者の歴史的位置づけを確認するため、彼らに関するモノグラフなどの二次資料を、主にベルリンの美術図書館で集中的に閲覧し、必要なものは適宜購入したほか、入手不可能なものについては複写などを行った。

次のステップとして、両者に関する一次資料の閲覧を行った。特に、カール・グロピウスの「ジオラマ」については、時代を考慮しても写真資料などは存在しない。それゆえ、彼自身ないし同時代の画家で、当時のベルリンの街を数多く描いたエドゥアルト・ゲルトナー（彼はカール・グロピウスのアトリエで働いてもいた）の作品は貴重な資料となった（図 4・5）。それらの作品については、ベルリン市立博物館やアルテ・ナツィオナール・ガレリーなどで閲覧を行った。

図 4 《ゲオルゲン通のグロピウス兄弟のジオラマ》1835 年頃、ベルリン市立博物館財団

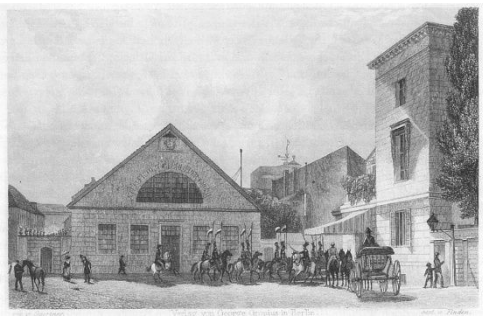

図 5 エドゥアルト・ゲルトナー《グロピウス兄弟のアトリエ》1830 年、アルテ・ナツィオナール・ガレリー

また、マルティン・グロピウスについては、当該建物のマルティン・グロピウス（旧ベルリン工芸博物館）を再度訪問したほか、ベルリン市内に残されているマルティン・グロピウス設計の建物を視察した。また、ベルリン工芸博物館設計に関わる資料を、ベルリン工芸博物館内図書室ならびにベルリン工科大学などで閲覧した（図 7）。

加えて、「グロピウスのジオラマ」についての基礎資料の調査と収集が重要であったが、それについては、同じくベルリンの美術図書館で閲覧した、当時の新聞記事や、ベルリン工芸博物館の過去の展覧会案内やガイドブックが貴重な情報を提供してくれた（図 6）。

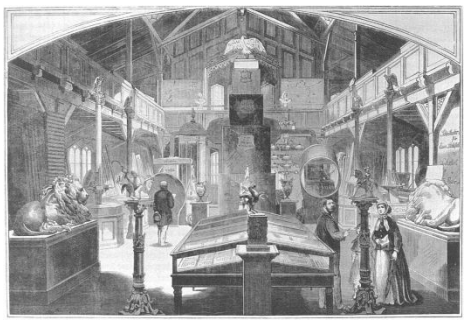

図 6 「グロピウスのジオラマ内ドイツ産業博物館の展示室」1868 年

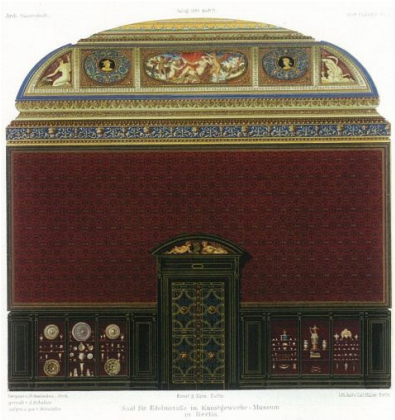

図 7 マルティン・グロピウス《ベルリン工芸博物館、金工の間のデザイン》1885 年、ベルリン工科大学

## ４．研究成果

調査・研究を進めたことで、これまで知られていなかった様々な興味深い点が明らかになった。それを次に箇条書きで挙げておきたい。

（１）マルティン・グロピウスは、シンケル派の最後で最大の建築家だと言われているが、グロピウス家がカール・グロピウスの時代から、シンケルと家族同然の親しい間柄にあり、公私ともに大きな影響関係にあったこと。

（２）「グロピウスのジオラマ」には、「芸術ホール」が付設されており、そこでは展覧会

や工芸品などの展示即売が行われていたことが、当時の資料から明らかになった。つまり、「ジオラマ」と「工芸博物館」は、展示をめぐる視覚の問題だけではなく、具体的な運営の問題でも、連続性を持つ施設だったのである。
（３）「グロピウスのジオラマ」の向かいには、「ジオラマ」用の作品を制作する「アトリエ」が存在し、それが若手芸術家の育成場所として機能していたことも、調査資料から明らかになった。そこから、「ジオラマ」と「工芸博物館」は、教育という観点からも共通性をもつことが理解される。
（４）「グロピウスのジオラマ」に端を発する「展示」「運営」「教育」といった問題意識は、マルティン・グロピウスによるベルリン工芸博物館建物の設計、ならびに建物内外の装飾プログラムに影響を与えていることが、設計図や、過去の写真などから明らかになった。

今回の研究では、カールそしてマルティン・グロピウスに関する基礎調査と、「グロピウスのジオラマ」から「ベルリン工芸博物館」への流れを、それぞれの建物の具体的な仕様や利用方法に沿って位置づけることに、かなりの時間と労力が必要であった。そのことが大きな理由ともなり、開館時ないしそこから数年間のベルリン工芸博物館における展示に関する資料調査について、現在判明している資料の確認以上の新規資料を見つけることができなかった。その部分の調査・研究を補完することが喫緊の課題である。また、本研究を、20 世紀さらには現在の、とくに工芸・デザイン作品を収蔵している美術館の展示の在り方に関する研究に繋げることも、今後の更なる課題であると考える。［この点については、19 世紀における工芸博物館の存在を別の角度からも分析するために、20 世紀における工芸博物館といわゆる「デザイン」の関係に関係する人物（例えばドイツ工作連盟設立に際しての重要人物であるヘルマン・ムテジウスや、美術批評家のユリウス・マイアー＝グレーフェなど）や、当時大きな影響力を持っていた雑誌（『Dekorative Kunst』や『Deutsche Kunst und Dekoration』など）に関する基礎調査を行った。］

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 池田祐子「ユリウス・マイアー＝グレーフェとヘルマン・ムテジウス―雑誌『Dekorative Kunst（装飾芸術）』創刊時の書簡について」京都国立近代美術館研究論集『Cross Sections』（査読無）、Vol. 7、2015 年、26-35 頁

② Yuko Ikeda und Rolf-Harald Wippich, “Hermann Muthesius und Japan”, in OAG Notizen, （査読無）, Heft 12, 2015, pp. 10-28.（国際共著）

③ 池田祐子「『Dekorative Kunst』誌とユーゲントシュティール―マイアー＝グレーフェとムテジウスの視点から」西川智之編『日本独文学会研究叢書：世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相』（査読無）、103 号、2014 年、3-19 頁。

〔学会発表〕（計５件）

① Yuko Ikeda, “Katagami Collections in Germany - Vorbilder as Official Strategy”, in International Symposium: KATAGAMI in the WEST（招待講演）, 2016 年 3 月 18・19 日、University Zurich, チューリヒ（スイス）

② Yuko Ikeda, “Julius Meier-Graefe und Hermann Muthesius - Briefe zur Entstehungszeit der “Dekorative Kunst”, in Internationale Tagung: Julius Meier-Graefe - Grenzgänger der Künste（招待講演）、2015 年 3 月 12～14 日、Stiftung Brandenburger Tor im Max Liebermann Haus Berlin、ベルリン（ドイツ）

③ 池田祐子「雑誌『Dekorative Kunst』とマイアー＝グレーフェ―ユーゲントシュティール擁護と批判の現場」シンポジウム『アート（芸術／技）の坩堝―世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌』（招待講演）、2014 年 8 月 2 日、豊田市美術館（愛知県豊田市）

④ 池田祐子「ウィーン～総合芸術の都市」如水会〈一橋フォーラム〉第 85 期『近代の都市と芸術』（招待講演）、2014 年 3 月 5 日、如水会館（東京都千代田区）

⑤ 池田祐子「『Dekorative Kunst』誌とユーゲントシュティール―マイアー＝グレーフェとムテジウスを中心に」日本独文学会秋季研究発表会（招待講演）、2013 年 9 月 29 日、北海道大学（北海道札幌市）

〔図書〕（計２件）

① 尾関幸（編者）、杉本俊多、大原まゆみ、岡本和子、初見基、海老澤模奈人、中島裕昭、星野宏美、池田祐子、圀府寺司、ベアテ・ミルシュ、長野順子、三輪玲子、都築千重子、田中正之、香川檀、北村昌史、渋谷哲也『西洋近代の都市と芸術５　ベルリン―砂上のメトロポール』竹林舎、2015 年［池田祐子「グロピウス：芸術と産業をめぐる華麗なる一族～ジオラマ、工芸博物館、そしてバウハウス～」、187-211 頁］

② ジョン・V・マシュイカ著（田所辰之助・池田祐子共訳）『ビフォー ザ バウハウス—帝政期ドイツにおける建築と政治 1890-1920』、三元社、2015 年

## ６．研究組織

### (1)研究代表者

池田　祐子（Yuko Ikeda）
京都国立近代美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：50270492